５．他地域の事例

（１）栃木県鹿沼市（ネコヤド商店街）

鹿沼市では、1999 年に材木町の路地裏に「Café 饗茶庵」が開店した。この経営者は 2009 年に日光市今市の路地裏玉藻小路に「日光珈琲」を、2012 年に鹿沼市の今宮神社の参道に「日光珈琲朱雀」を、2013 年に日光市本町の御用邸正門通りに「日光珈琲御用邸通」を開店している。自分達で店を築くことを方針として、廃屋を自分達で改装している。

最初のカフェが始まった 1999 年頃は、地方都市でも中心市街地の空洞化が進行していた。鹿沼も同様で、街の東側に店や住宅が移ったため、子供の頃賑やかだった街は、空き店舗や空き家が目立ち、寂れた状態となった。周りの店がどんどん閉まっていく中、どうすればお客様に来ていただけるのかを考えた時、「地元の街が楽しければ、他の街に行く必要がなく、逆に他所からも人が集まってくる。鹿沼をそういう街にしたい」と思った。カフェも路地裏の分かりにくい場所にあり、迷いながら行く店として、口コミで来ていた。交通の不便な場所であっても、個性を持っていれば、好きな人は遠くからでも来てくれる。

そこで、「仲間(店をやっている人)を集めたい。でも、いきなり店を持つのは、資金等のリスクもあるから、まず、イベントに出店して体験してもらおう」と考え、2006 年 2 月に「ネコヤド大市」を始めた。毎回、起業を目指す、様々なチャレンジ店が 15～30 店舗参加し、多い時には 60 店舗近くになった。出店を重ねると実行委員会から支援が受けられる仕組みになっており、出店を重ねることは、開業する前から常連のお客様を付けることにも繋がる上、独立後もお互いに情報交換や共通イベントの開催等、独自のコミュニティー形成に役立っている。

ネコヤド大市から独立して、鹿沼市内に開店した店は、5 年間で 15 店舗となった。業種は、カフェ、古着屋、雑貨等様々で、大半の経営者が 40 歳以下で、地元出身者以外も多いという。半径 300m以内に各店舗があるため、街を歩いてお店巡りを楽しむお客が徐々に増えた。そこで、お店巡りと共に街巡りをさらに楽しんでいただけるよう、仲間と情報発信をすることにした。その一つが街歩きマップ「ネコヤドＭＡＰ」である。表面は鹿沼の街とその住人のイラスト、裏面は自分たちのお店や自分たちが鹿沼で「いいな」というお店・名所等をピックアップしたものである。最初は 1 万枚を作製したが、好評で増刷することとなったが、資金の面や多くの人に関わってもら

いたいという想いもあり、協力を要請し、賛同した方に一口１万円を出資してもらい増刷した。イラストの人物には、名札が付いていて、出資者の名前が分かる。個人、鹿沼市、商工会議所を始め多くの人が協力し完成したマップは、東武鉄道が各主要駅に置いたことで、都心で目に触れる機会が増え、県外にも鹿沼の知名度があがった。すると、雑誌や新聞等で取り上げられる機会が増え、首都圏から多くの方々が鹿沼に遊びに来てくれるようになった。

ネコヤド大市から新たに出店した店舗と「ネコヤド商店会」を結成して、根古屋路地から街中へ拡大し、2012 年 3 月から「ネコヤド商店街」として、毎月第 1 日曜日に開催している。（ネコヤド商店街は 2016 年に終了）

2016 年には、鹿沼市の中心市街地に、空いていた旅館を再生したゲストハウスをオープンさせた。名は「CICACU（シカク）」（“CI”は“Civic”で鹿沼の人たちを、“CA”は“Cabin”でゲストハウスに泊まる旅行者を、“CU”は“Culture”（文化）や“Curation”（共有・編集）を意味）という。

このゲストハウスは、単なる宿泊施設ではなく、地元の人や旅行者が集まれる場所になっている。２階にある大広間をレンタルペースとして開放しており、ヨガ教室や料理教室、音楽ライブなどが開催されている。

自転車の卸企業と協力してレンタサイクル事業も始めている。自転車に乗って、鹿沼の郊外へ出かけられる。郊外には豊かな自然や田園風景が広がり、農業を頑張っている若い方や田舎暮らしを楽しんでいる移住者がいる。一方で、鹿沼の街中にも魅力的な方がたくさんいる。こうした人との触れ合いの拠点をなることを目指してさまざまな取組みが進められている。